

看護研究

A病院における小児の救急受診と救急受診前電話相談の現状調査

古橋ひろみ、山本由紀子、加畑晴香

北部医療センター 救急外来

キーワード：小児、救急受診前電話相談、救急受診

I. 目的

A病院で実施している小児の救急受診と救急受診前の電話相談の現状を知る。

II. 方法

平成29年8月1日から平成30年1月31日までに、A病院の救急外来に電話相談をして受診した小児の年齢・受診曜日・受診時間、診察内容、転帰を診療録より、電話相談内容をトリアージ用紙より収集し、単純集計した。

III. 倫理的配慮

情報公開揭示文により研究目的、方法、研究結果の公表、匿名性の保持、データの管理方法、参加による不利益がないことを説明した。京都府立医科大学医学倫理審査委員会の審査を受け承認（ERB-E-365）を得た。

IV. 結果

受診総数は872件で、月平均は145件、8月が177件と最も多かった。曜日別では、土日祝日が多く全体の52.4%を占めた。受診時間は、0～9時が9.7%、9～17時が40.8%、17～24時49.5%であり、夕方から夜中にかけての受診が多かった。

患者の年齢は0～3歳が51.9%、4～6歳が18.0%、7～9歳が12.4%、10～12歳が9.3%、13～15歳が8.4%と、乳幼児が全体の半数以上を占めていた。

診察内容は診察のみが17.3%、診察と投薬のみが35.6%、その他47.1%は検査や処置を行った。

救急受診後は74.0%が一回の救急受診だけで治療を終了し、16.1%が専門外来を紹介、4.4%はかかりつけ医を紹介、5.5%が入院となった。

電話相談では発熱についての相談が全体の33.5%で、その内容としては「受診の必要性」、「熱に対する対処方法」、「薬剤の使用法」であった。

V. 考察

土日祭日の受診割合が多く、他施設が休診であるときに受診が急増している。受診者の年齢は、急な発熱などを発症しやすい0～3歳の受診が多数を占めている。受診時間も夜間の割合が多いことが分かった。これらより、急な発熱を起こしやすい乳幼児は、休日や保護者が仕事を終え帰宅してから受診するケースが多いことが考えられる。

広野らは、「夜間休日の救急外来受診の増

加について医療者の見解としては、育児情報の氾濫や看護能力の低下、女性の就労、個人の権利意識の増大や生活の24時間化などの他に、医療のコンビニ化などがある。」¹⁾と述べている。A病院では、電話相談を依頼している。これにより、実際には電話相談の段階で、ある程度のトリアージを行うことができ、迅速な診療につながっている。また、来院した患者のうちの74%が一回の受診で終了していることから、コンビニ受診ではなく、不安を抱えた患者のニーズにあわせた医療が提供できていると考える。

受診の時間帯から、共働きで夜間でないと受診ができない保護者にとって、小児科医の少ないこの地域において、安心して子育てをしていける環境を提供していると考える。

現在、救急受診前電話相談は、小児科医と対応基準を作成し実施している。しかし、受診のタイミングなどの基準の見直しを行う必要性を感じており、今後は小児科医との症例検討の実施を考えている。このことが、スタッフのスキルアップや若手の育成にもつながっていくと考える。さらに、救急外来だけではなく、小児科外来や病棟と連携を強め、症状とその対応策、受診のタイミングなど統一した指導を行っていく必要があると考える。

VI. 結 論

A病院の小児の救急受診は、土日祝日の夜間帯の乳幼児の受診が多い傾向にある。受診前の電話相談は、発熱についての相談が多かった。

VII. 引用参考文献

- 1) 広野優子、山中龍宏、保護者はなぜ不要な救急外来受診をするのか：外来小児科
vol12 No.1. 2009